



「杵築古写真」(大分県公文書館)



「杵築古写真」(大分県公文書館)

3 七島いと人々のくらし

「苧を編む」：写真上

足踏み式の織り機で苧を編む風景です。足踏み式は特に踏む力を均一にしないと厚みが変わったり、縦糸が切れたりと熟練の技が必要とされる作業でした。

「出荷を待つ七島表」：写真下

大正 12 年頃に撮影された出荷前の問屋の様子です。当時は七島い栽培がもっとも盛んな時期であり、倉庫の前に並んだたくさんの七島苧からもその盛況ぶりがうかがえます。

(1) 農家と七島い

「七島いの生産による収入は何万両かはかりしれない」と大蔵永常が語ったように、江戸時代から現代まで、農家の大切な金銭収入でした。しかし、その背景には稲作とは比べものにならないほどの労働力を必要としました。稲作、いぐさ、七島いの労働力を比較した場合、その比率は1:4:6とされています。実際にいぐさと七島いの労働時間を比較した調査報告では、2倍以上の差があります。もっとも労働力を必要とするのが収穫した後の加工作業で、全体のおよそ6割にあたります。加工作業には分割・乾燥・製織などの作業があり、調査を行った七島農家のほとんどがこの期間のことを思い出として語ります。特に、七島いは水に濡れると黄色く変色し、売値が半分に下がってしまうため、天候に左右される乾燥はもっとも気を使う作業だったようです。そのような苦勞から杵築では七島いのことを「びんぼうぐさ貧乏草」と呼ぶ人もいました。

七島い・いぐさの作業別労働時間（10a 当り）

作物名	七島い						いぐさ		
	昭和40年			昭和57年			昭和58年		
	労働時間 (時間)	区分時間 (時間)	区分比率 (%)	労働時間 (時間)	区分時間 (時間)	区分比率 (%)	労働時間 (時間)	区分時間 (時間)	区分比率 (%)
苗代				7.1			11.8		
採苗株分	97			94.0			57.9		
本田耕起	4	151.6	23.5	8.0	151.6	29.7	6.5	110.5	48.1
本田整地	16.1								
基肥	4.1								
植え付け	30.4								
除草剤散布	2.1								
手取除草	22	126.2	19.6	5.0	65.0	12.7	4.6	4.6	
病虫害防除	41.7								
追肥	4.5								
うら切り 倒伏防止	42.2								
灌排水	13.7								
その他の管理		363.8	56.9		294.4	57.6		85.5	37.3
刈り取り	46.3								
すぐり選別	70.4								
分割	118.2								
乾燥	128.9								
その他				2.4					
(合計)	641.6	641.6	100	511.0	511.0	100	229.9	229.9	100

(大分県い業指導所調)

(農水省統計情報部調)

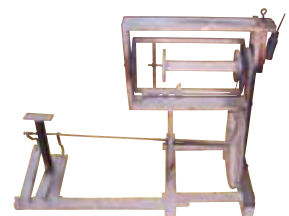
七島表に欠かせない道具たち

七島表を制作するには多くの道具が必要となります。七島いを分割するために使うワキダイは現代でもまったく形を変えていません。

農家では、畳表の縦糸も自作していました。イチビという植物の皮をイチビワキの先端に付いているくしの歯で細い繊維状に裂きます。これをタネリヨリという道具でより合わせて一本の糸にします。完成したイチビ糸は一束に巻かれ製織まで保管されます。



ワキダイ



タネリヨリ



イチビ糸



イチビワキ

七島いができるまで

3月 育苗

前年に準備した苗床に3月下旬頃に藁などを広げて焼き払い、発芽を促します。



5月 植え付け

5月上旬から下旬、苗を掘り上げ、準備した水田に手作業で植付けをします。



6～7月 管理

生育中は施肥・病虫害防除・水管理・倒伏防止など多忙な作業が続きます。



8～9月 収穫・分割

7月下旬から9月上旬、晴天の朝夕時に刈り取り、分割して砂浜などで天日乾燥します。暑い季節で、朝から晩まで大変な重労働です。



12月 製織

農閑期を利用して畳表を織ります。足踏み式からモーターの機（ハタ）に変わり、原料藁を1本ずつ藁指（イサシ）で送る半自動織機で1日5～6枚を織り上げます。



仕上げ

織った畳表は乾かして、表面を擦り、色沢品位などで品合わせをし、10枚一束にして出荷します。

